

出会いに恵まれた人生

幸野 健

日本医科大学千葉北総病院 前教授

I. 出会い

「対話の哲学者」マルティン・ブーバーは、「出会いの中で人は真の人となる」という。現象学者・山口一郎先生は、「人は、いつか、どこかで、ある人に出会うのではない。『いつか』という時間と『どこか』という空間の真の意味は、出会いの経験を通して初めて理解できる」と書いておられる。私の人生は、いつも「ある人たち」との「実感のある出会い」に導かれてきた。もちろん「出会い」には喜びだけでなく、悲しみや痛みもあった。「出会い」は、常に「次の出会い」を予告していた。「それ It」としかいいようのないものに引っ張られてきたようだ。

II. 医者になりたくなかった：両親との葛藤

内科開業医の父（大阪大学卒）は、休みなく働く、「天晴れ」な医師だった。だが厳しかった父に愛憎半ばする気持ちをもっていた。私は文科系志望で、「医学部に行かない！」というたびに両親と喧嘩になった。根負けして両親が諦めることもあったが、途端にしょげてしまう。可哀想になり「医学部に行くよ」というと元気になる。この繰り返しだった。

結局、大阪市立大学医学部に入学したが、歴史、哲学、心理学、数学や論理学の本ばかり読んでいた。それ以外にしていたのは、社交ダンスとスキーくらいだった。

III. 夢見て行い考えて祈る

父の友人に、阪大第三内科教授だった故・山村雄一先生（のちに阪大総長）がおられた。「山村先生に抱っこしてもらったのを憶えてるか？」「ああ、あのときのオッチャン」というぐらいの感じだった。幼児期と学生時代の2回くらいしかお会いした記憶がない。

先生の名言「夢見て行い考えて祈る」に影響を受けた人が多いことはネットでみてもわかる。無神論者の父が、「祈る」で終わる言葉をたびたび語るのを不思議に思っていた。解釈にはいろいろあるが、父のそれを表に示す。この言葉を通して山村先生に出会っていたとわかるのは、何十年も後のことだった。この魔法の言葉のお蔭で、多くの阪大出身の先生方と出会うことができた。「その言葉を知っているとは！」と、すぐに親しくなれた。最近、阪大教授に就任された藤本学先生は『『人事を尽くして天命を待つ』よりも深くて詩的…』と評されたが、さすがと思った。より楽しくてダイナミックなのだ。禅でいう「遊戯三昧」のような。

表 山村先生の格言：父の解釈と敷衍的説明

夢見て、行い、考えて、祈る	
夢見て	まず夢をもつこと、展望がないようではダメ。
行い	実践第一。夢見たら、そのままではなく、すぐ動く。動きながら考える。実践なき認識はなく、認識なき実践なし。
考えて	しかし、反省も重要だ。
祈る	反省にとどまるのもダメ。結果に執着せず、大自然＝宇宙の尊厳に任せる。人間が考え出した、ちっぽけな「絶対神」「創造神」「いわゆる神仏」に祈るのではない。

↓
「とどまりつつ、流れる、生き生きとした現在」↓
「身辺多忙、^{すこ}健やかにして、春を待つ」の心境

- 高浜虚子の弟子であり、山村先生と父の先輩で、俳句の師である阪大出身の外科医、中村若沙先生の俳句。
- 単なる気候の「春」ではない、春に象徴される心の状態。
- 心身共に健やかにすごしつつ、動き（働き）ながら、心の中にはひそやかな希望がある（待つ）。「動く」と「待つ」は同時、したがって、「夢見て」、「行い」、「考えて」、「祈る」も、ほぼ同時。
- 私の名前「健」は、この句の「健やか」にちなんでいるとのこと。

議に思っていた。解釈にはいろいろあるが、父のそれを表に示す。この言葉を通して山村先生に出会っていたとわかるのは、何十年も後のことだった。この魔法の言葉のお蔭で、多くの阪大出身の先生方と出会うことができた。「その言葉を知っているとは！」と、すぐに親しくなれた。最近、阪大教授に就任された藤本学先生は『『人事を尽くして天命を待つ』よりも深くて詩的…』と評されたが、さすがと思った。より楽しくてダイナミックなのだ。禅でいう「遊戯三昧」のような。

IV. 父と乾癬

父が乾癬になり家庭環境が変わった。母もリウマチとSjögrenに苦しんだ。さらに金目当てのクレーマー事件も父を苦しめた。父は1980年3月3日、私の国家試験直前、いまの私と同じ65歳で急死した。この辺の事情は、大概マミ太郎・筑波大学教授や鶴田大輔・大阪市大教授のご厚意により学会でも講演させていただいたし、他誌にも書かせてもらった¹⁾。父の乾癬が、皮膚科入局を決定したともいえる。私と違い美男だった父の遺体は乾癬でボロボロだった。遺体は「汝、医学を軽んじるなかれ!」と語っていた。父と初めて真に出会った気がした。

V. 大阪市大皮膚科入局から留学まで

Pinkusの弟子、故・濱田稔夫教授(父の主治医)は、「記載皮膚科学」の意義を説かれていたが、未熟な私には「記載=記述」こそ、論理学・哲学を基礎づける「事象そのものの研究=現象学」の訓練であることが理解できておらず、退屈だった。いまから考えれば恥ずかしく残念なことだ。

苦しむ患者さんたちと日々出会う中、「不肖の医師」である私も、だんだん「人」に近くなっていった。臨床は、堺市立病院におられた東禹彦先生(東皮フ科クリニック)門下や大阪回生病院の故・須貝哲郎先生門下の先輩方から多くを教わった。

生化学教室で大学院研究をさせてもらうことになった。故・森沢成司教授は、海軍軍医時代以来の山村先生の弟子だった。「阪大皮膚科の西岡清先生(現東京医科歯科大学名誉教授)という若手研究者を高く評価している。将来西岡先生のところに国内留学できるよう手配してあげるから、まず基礎技術を学びなさい」といわれたのを憶えている(結局、諸事情から果たされず、西岡先生と個人的にご挨拶できたのは、10年近く後の米国での学会だった)。

その後紆余曲折あり、成長因子研究で有名な阪大歯学部生化学の鈴木不二男教授(現名誉教授)の下に国内留学させていただき学位研究を修了させていただいた。

大阪市大皮膚科で助手にしてもらい、細胞増殖に係るポリアミンの遺伝子機構を研究したり、コラーゲン・ゲルで人工皮膚を作成し、その中での細胞動態を研究したりした。英語論文の数は増えたが、臨床に役立たない自己満足だった。だが、1993年、日本皮膚

科学会から基礎医学研究費(資生堂寄付)を頂戴したのはうれしく、仏壇で父に報告した。

一方、ユングの分析心理学にも惹かれ、夢分析や箱庭療法の勉強もした。ご縁があり京大の故・河合隼雄名誉教授にチューリッヒ・ユング研究所の夏季セミナーに連れて行っていただけたのは感動的だった。心身医学研究はその後も続け、大阪警察病院におられた羽白誠先生(はしろクリニック)との出会いから、皮膚科心身医学会にも入れていただいた。心身医学に興味をもったお蔭で、後にたいへんな患者さんに「出くわす」「(出合い)とはいいたくない」ことになるのだが……²⁾。

新幹線で吉川邦彦先生(現阪大名誉教授)と偶然隣り合わせになったご縁で、研究、人生問題などたびたび相談に乗っていただいた。数年後、ご紹介でトロント大学、Sauder教授の下に留学させてもらった(1992～1994年、東医歯大の近藤靖児先生(近藤皮膚科クリニック)がおられた)。帰国前、近くのマクマスター大学でEBM運動が勃興し、何度かセミナーに参加した。参加者には異様な熱気が漂っていた。のちに世界潮流になるとは考えてもいなかった。元来、統計学や疫学は好きだったので、その後もEBM研究は続けることになった。

VI. 帰国後

基礎医学の才能のなさを痛感し、乾癬、アトピー、蕁麻疹と膠原病をテーマに臨床研究が中心となった。「記載・記述」の面白さがやっとわかるようになったのだ。

蝶研究で有名な大阪市大OB高橋邦明先生(高橋皮膚科)のご縁から、蝶研究者でもあられる西山茂夫先生(現北里大学名誉教授)に大阪でご講演賜った。情熱と知識量に圧倒され、聴衆も最後にはクタクタになるほどだった。終了後も長時間、研究についてご教授いただいた。亡父の書架にあった『誤診し易い皮膚疾患』(金原出版、1968年)を持参したら、「僕の最初の本だよ」とおっしゃったのでサインしていただいた(のちに本誌で宮崎大学・井上勝平名誉教授が、この本を探しておられるのを知りコピーをお送りして喜んでいただいた)。

調子に乗った私は、何度か西山先生にEBMに関するご意見を賜りたい旨のお手紙を書かせていただいたが、私のごとき無名の若輩者にも、毎回、非常に懇

切丁寧なご返事をいただいた。西山先生の「EBMはいいと思うが、ガイドラインは不要」というご意見は変わらなかった。確かに真摯な皮膚科医にガイドラインは要らないだろう。

1990年代後半、地方会で強皮症の発表をしたとき、来臨されていた当時長崎大の片山一朗先生(現阪大名誉教授)から、「治療がよくない!」と雷を落とされた。「鉄人28号みたいな人」に張り飛ばされたような気がした(鉄腕アトムが片山先生のシンボルだが)。「将来、この人の部下になるのでは」という予感がよぎった。それは数年後に実現した。

石井正光先生(現大阪市大名誉教授)の下、大阪市大では、漢方や代替医療の現代的研究や深井和吉先生(現大阪市立総合医療センター部長)による最新の遺伝子研究が隆盛となり、私の居場所はなくなりつつあった。当時、西山先生からお手紙を頂戴したが、「面白くないなら大学を辞め、たくさん患者をみられる病院に出なさい。そのほうが臨床研究は進むだろう」と書かれてあった。また「東京に来るのでもよいなら、紹介できるのは、たとえば日本医科大学・川名誠司教授(現名誉教授)のところなど…」とあった。このことは、実に10年後に実現する。

VII. 吹田市民病院へ

転出先の吹田市民病院は阪大の関連病院であり、阪大皮膚科の非常勤講師にいただいた。人員不足でたいへんな中、吉川先生、板見智先生(現阪大皮膚・毛髪再生医学講座教授)、佐野栄紀医局長(現高知大学教授)にはたいへんお世話になった。

また、阪大ご出身でアトピー治療研究会創立者・青木敏之先生(あおきクリニック)との出会いがあった。「EBMを勉強していたのなら皮膚科でそれを進めてみては」と励ましていただいた。ご紹介で、Cochrane Skin Group主宰のH. Williams先生と出会い、European Dermato-Epidemiology Networkに参加させてもらった。また、青木先生に同行させていただいた米オレゴンでのISADで、九州大学・古江増隆教授にご紹介いただいた。その出会いは、皮膚科で最初のシステマティックレビュー『厚労省研究班:よりよい治療のEBMデータ集』(2002~2004年)につながって

いった。また、三好彰先生(三好耳鼻咽喉科クリニック)とのチベットでのアレルギー疫学調査にも参加させていただいた[本研究はのちに片山先生、現札幌医科大学・澄川靖之先生(すみかわ皮膚科アレルギークリニック)も参加された]。

さらに、東京女子医科大学の川島眞先生(現名誉教授)より、ご自分の論文をEBM的に評価して欲しいというお申し出があった。忌憚なく評価したので、気分を害されると思ったが、意外に了解してくださりうれしかった。

EBM論議が出だしたころ、本誌「声」への投稿が機縁となり、当時の編集委員、栗原誠一先生(湘南皮膚科)にお目にかかることになった。先生のご紹介で多くの神奈川県皮膚科医会や臨床皮膚科医会の先生方との楽しい出会いがあった。のちの上京時、このお付き合いが非常に大きな支えとなってくれた。

VIII. EBM狂騒曲時代

京都大学・宮地良樹先生(現名誉教授)、秋田大学・眞鍋求先生(現名誉教授)のご紹介で、皮膚科最初のEBMに則った悪性腫瘍ガイドライン作成に参画した。非常に難航し、委員長の信州大学・斎田俊明先生(現名誉教授)も、お気の毒なほど、睡眠時間を減らして作成に没頭された(この辺の事情は他誌に書いた³⁾)。その後、10件を上回るガイドライン作成に携わることになり、多くの先生方と出会えたのはうれしいが、多忙を極めるようになった。この間、片山先生が阪大教授に就任され、関西ろうさい病院への転勤など、診療環境改善に尽くして下さった。

現在、ガイドライン作成には、GRADEシステムという煩雑なプロセスが必要とされるようになり、すでに私の手に余るものになっている。GRADE成立には、カナダで最初にEBMに出会った面々が関与しているが、「よりよい医療を臨床家と患者のもとに」という本旨とかけ離れてきている。「これでよかったのか?」という思いと、西山先生の「ガイドラインはいらない」という言葉が心に突き刺さる今日このごろである。

IX. クレーマーたちとの出会い

吹田市民病院と関西ろうさい病院では、多くのク

レーマーと「出くわす」ことになったが、「よい出会い」があったのだから「悪い出会い」もあるのは仕方なかろう。彼らとの苦渋に満ちた遭遇は多くの経験をもたらしてくれた。お蔭で「クレマー問題研究者」として扱っていただくこともある⁴⁾。

X. 東京へ、そして千葉へ

2009年夏、秋田大の眞鍋先生から電話がかかってきた。「東京へ行かないか?」「東京のどこで飲むんですか?」「アホ! 僕が親しくしている日医大の川名先生のところだよ!」ということだった。家内も上京に同意してくれた。「面接」があったが、川名先生、旧知の安齋眞一先生(現日医大武蔵小杉病院教授)、竹崎伸一郎先生(浅草二天門クリニック)と楽しく酒を飲んだだけだった。片山先生と川名先生とは旧知の仲であり、スムーズに上京させていただいた。山村先生とご縁のある私が、山村先生のライバルだった丸山ワクチンの丸山千里先生ゆかりの地に勤めるというのも不思議な巡り合わせだと思った。

翌年、分院の千葉北総病院に移ったが、当時諸事情から、うつになったときがあった。東京慈恵会医科大学・中川秀己先生(現名誉教授)と東京通信病院の江藤隆史先生(あだご皮フ科)から「大丈夫か?」とお電話をいただいたときは心底うれしかった。また、筑波大学・大塚藤男名誉教授が分院近くの柏にお住まいで、関連研究会があるたびに来ていただき、いろいろとご教授賜ったのも素晴らしかった(日本酒論も含めて)。

XI. まだまだ出会いは続く

日医大は佐伯秀久教授に代わり、若手が増え発展している。気がつけば私は父の享年65歳に達し定年となった。現在、日医大千葉北総病院(現部長は神田奈緒子先生)を手伝いながら、日医大OB中村進一先生のご仲介で、会津中央病院でも週2回診察させていただいている。山間を含む広大な医療圏の中、金子史男名誉教授、山本俊幸教授はじめ福島県立医科大学の先生方や会津の諸先生にお世話になりながら、老体に鞭打っている。

特筆すべきは、大震災の中、孤軍奮闘、医療を守り続けた、何冊もの著書もあるアトピー治療研究者、地域医療の論客でもある⁵⁻⁸⁾、竹田綜合病院の福島県



写真 竹田綜合病院の福島県立医大臨床教授・岸本和裕先生(右)と

立医大臨床教授・岸本和裕先生にお目にかかれたことだ。会津に来るからには一度お会いしたいと思っていたので嬉しかった(写真)。先生と出会い、会津は私にとって「出会いの町」^{しゅと}、「酒都」になった。

XII. おわりに

大きいことはできないが、周囲の人だけでも照らそうと、「一隅を照らす」(伝教大師最澄)を自分のモットーとしてきた。患者さんの人格、性格(この2つは明確に違う)、家族、職業と他疾患との関連における「トータルケア」を教育してきたつもりだ。最近は、「その人の運命に介入する運命的皮膚疾患」という概念を提唱している。

ここに書ききれない多くの先生や患者さんとの出会いのお蔭で、まだまだ「夢見て行い考えて祈る」ことができている。若い先生たちには「出会い」を大事にして欲しい。もちろん意図的な「出会い」は不可能だ。人格的な対峙が必要だからだ。しかし、常にその日を夢見て心を開いておかなくば「出会い」はありえない。「出会い(あい)なき人生は、愛(あい)なき人生」とオヤジ(ジジイか)的駄洒落を贈っておこう。

〈文献〉

- 1) 幸野 健：医薬の門 57：114, 2017
- 2) 幸野 健：皮膚病診療 40：35, 2018
- 3) 幸野 健：日皮会誌 128：1649, 2018
- 4) 幸野 健：大阪府保険医雑誌 6：9, 2014
- 5) 岸本和裕：ほんまもん：未来を変えるために私がしていること、きみたちにできること、健康ジャーナル社、東京、2015
- 6) 岸本和裕：これで最後の…アトピー卒業ブックーアトピーに「さようなら!」、健康ジャーナル社、東京、2011
- 7) 岸本和裕：アトピー実戦テキスト-アトピー卒業ブック 2、健康ジャーナル社、東京、2013
- 8) 岸本和裕：皮膚疾患クエスチョン 100+α、中外医学社、東京、2018